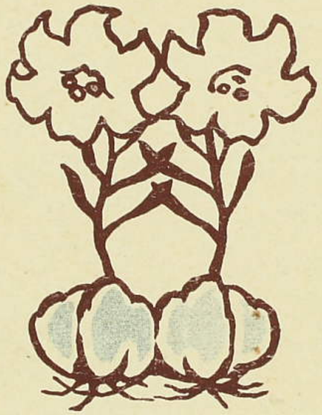
小羊

高濱長江



序

春の曙に精靈の翅あるを、秋の夕の野末にも名無艸の夢あたゝかなるを我が知り得たるは餘りに遲かりき。九重の奥、紫の御苑に雲を呼び、風を起さしむべき駿馬を獲ざるは之れがため也。

さはれ此「こひつじ」一篇わが手飼の家蓄なるを奈何にせむ。腫もつ全身に爛るればとて自ら害ふに忍びんや。

嗚呼疾み且つ迷へる羊の跡を逐ひゆく牧者の心あはれならずや。

著　者

おさむところ、おほかたは基督教世界。心の花。新人。護教。日露交戰錄。新天地。平民新聞。鷺城新聞らへ掲げたるもの也。今、各社に於て之らの轉載をゆるされたるに對しては茲に特記して感謝のこゝろを表す。

こは再び戰地に向ふ我かたみの卷なり。

目次

艦橋夜半の英雄……一
夕闇……八
花賣娘……一三
寺の門前……二〇
書寫山嶺夕ぐれの懷……二三
綾瀨河畔夕ぐれの懷……二六
古はがき……三四

クエカー信徒……七
出征吟……一四
八雲……一四
出塞……一四
うらなひ……一五
幸福……一五
吾友のなさけは……一五
旅順落城歌……一六

遺髪……一六
正義の歌人に寄す……一六
十字架……一七
雀とゆりと……一八
戀人と……一八
月下の遺遥……一八
雅歌の一節を讀みて……一八
夢なれ……一八

ふろく(三十一字詩)……卆
花さそふ
なごりな雲に吹きとめて、
しばしは匂へ
春の山風。……古歌

小羊

高濱長江著

艦橋夜半の英雄

『嗚呼希伯來の詩人
哀歌のこゝろ今こそは

おのが魂にも通ひたり
夢も物かは泡沫も。

遺孤の掬育我れ諾へば
逆捲く浪を蹴破りて
笑みて立ちたる面影の
はやも藻屑となりにしか。

「出帥の表」は古りたれど
人と時とは異なれど
感懐は同じ亡き人の
願に副はむ志。

願に副はむおのが身も
鳴弾今に飛びくれば

青海原を紅に
染めて斃るゝ運命なり。

「心にかゝる雲なし」と
勇み立ちたる梓弓
曳きて還らぬ益荒夫や——
噫運生の心今ぞ識る。

それよ慰籍に吹くは今』と
秘めたる笛の歌口を
艦橋に凭り濕めせども
哀れ唇戦けり。

『淺き瀬にこそ仇浪はあれ
舳艫に碎くる浪の音も

千尋の底の嘲りや
噫我れ將帥の器ならず』と。

「千鳥の曲」に名も著るき
愛玩の笛投げ捨てゝ
こまぬく腕にはふるゝは
「八代」の艦長の涙かな。

嗚呼此こゝろ誰か知る
名笛吹かば裂けもせめ
老鐵山の空ら高く
月は朧ろに照らせども。

——八代艦長、白石少佐の逝遠を哭す——

夕闇

秋の夕暮れ只ひとり
冥想に憬がれて
小川の畔漂らへば
神の息吹や地に觸れし
尾花は散りて空らを舞ひ

やがて近邊は暮れにけり。
野とも山とも辨けがきた
濃き紫の夕闇に
靉く靄は白らぎぬの
惟幄舒べし眺めなり
流れも零時淀みけむ

夢より安き野郷かな。

深山の空らの白雲も
地に觸るゝごと流れ來て
天らと地とを結びたり
雲井の橋を天使の
ゆきかふ姿夢みたる

過ぎし聖人も偲ばるゝ。

靄を罩めたる森の端に
今し點けたる灯は
二つ四つ三つ閃めきて
幽玄の感懷胸に湧き
魂の緒琴をかき鳴らす

神霊の氣息や通ふらむ。

森端の萩の花蔭に
女神の裳慕ひゆく
羊の群れも歩むべく
蟲のすだきも頻るらむ
あゝ夕闇の此こゝろ

紫苑の山も偲ばるゝ。

花賣娘

冷たき石は蘚苔に老い
蔓蔦も這ふ礎に
高樓の壁光りなし
世々の塵にや染みぬらむ

自然なる歴史の跟。

迷路の如く榮えたる
都大路をうら若き
鄙の乙女の「花や花や」と
おらぶる聲は雛鳥の
餌をば求るに似たる哉。

眞球と紛ふ脚のいろ
緋百合詐く裙のいろ
天使のごと漂らひて
黄菊白菊千日草
賣りゆく姿憐れなり。

いづれ鬻悒き賤が家に

夕べ花束結びつゝ
晨花籠背負ひつゝ
果敢く世にも生ひ立ちし
運命をいかに嘆つらむ。

黄金の鞍に珊瑚珠の
鞭を振りつゝ走りゆく

駒の蹄に雲のごと
湧き來る塵に塗れては
華客なく棄つる花もあり。

華客なく棄てし花束の
解けて散りたる水の面に
猶ほ浮き出づる泡沫や

塵に染まれる奇しき文(あや)
下へ〳〵と流れゆく。

天らに星いろ地に花のいろ
薫り懐(ゆか)しき花園や
雫滴る天津國
そこに世の榮(はえ)限るごと

今も昔も稱(たた)ゆれど。

汀(みぎわ)に立ちし乙女子の
花の行衛を見守りて
涙湛ふる眼の光り
胸に湧き來る其感懷(おもひ)
嗚呼美はしき愁ひなるらむ。

寺の門前

秋の夕ぐれ「威嚴寺」に
葦酒の入るも許さじと
立てし簷端の石標
監視る仁王の武者振りや。

戰慄きつゝも境内を
襟搔き合せ竊と見れば
夕陽眩ゆき白壁に
映る茜の褌かな。

書寫山嶺夕ぐれの懷

故郷はいづこ秋の空ら
獨り蒼海漕ぐおもひ
思に堪えず漂らへば
こゝ靈山の嶺雲搖曳。

あゝ女詩人の「冥きより
冥き路にぞ入りぬ」てう
歌の精神を偲ぶれば
憂愁煩悶は絶えぬ世か。

風跟雨跡九百年
逝にし阿奢梨の面影を

伽藍の壁に彫みたり
晝も小暗き森蔭に。

薫るは幽谷の白百合かも
遙かに蟲と細流の
囁ぐ文は蒼穹の
不朽ぬ生命の樂譜かも。

萬有萬代に光榮あるを
我のみ罪に泣くべきか
苦の細道夕闇の
迷ふは何のこゝろぞも。

霜に堪えたる楓葉の
散りゆく色に「碎けたる

人魂にぞ神靈は宿らめ」と
永遠の默示を讀むおもひ。

此秋山上の垂訓を
靈妙る胸に誦ずれば
幽懷は走る二千歳！
汐路渺茫三千里！。

岸に逆捲く濤聲も
零時は磯の松風に
夕べの曲ゆるすごと
胸安らけき此山境。

あゝ鐘樓の響く音に
「遙かに」出づる「山の端の

月」に無限の道(ことは)あり
聖者羅馬に在(あ)る感懷(おもひ)かな。

綾瀨河畔夕ぐれの懷

蒼空ら高き秋の夕ぐれ
塵の都を人知れず
こゝ河畔に彷徨(さすら)ひぬ

心に染みぬ詩を讀むに飽き
しばし自然の懷(ふところ)ろに
孤吟飄遊あゝ胸躍る。

見よ樺(はんのき)の樹々を縫ふ
太古(むかし)ながらの流水に
あゝおちこちに哀れ〳〵

いろ移りゆく彩雲や
亂れ流るゝ入日影
天の使の裳かも。

あゝ胸更らに戰くよ
蘆の汀に蘆の汀に
富士の高根のほのぐと

匂ふばかりの姿かな
三千年來はらからの
仰き望める此高嶺！。

危ひかなや時代の思想の
亂れ〳〵て青春の
男女の胸は限りなう

あゝ何物にか憬かれつゝ
闇夜に物をあさるごと
あらぬ情感に問ゆるよ。

「華嚴の瀧」の悲歌の名殘も
今入相の鐘のごと
響くよ〳〵吾胸に

おゝさらばホザナの君よ
あはれ此高峯の空らに
盡きぬ眞清水注ぎてよ。

あゝげに
過ぎしみめぐみ
思出れば

孤身の幽懐不可寫
たゞ
涙に咽ぶ叢の蔭！。

古はかき
人里遠き畔道に
一ひら落ちし古はかき

其水莖の主や誰れ。
語るは歌か詩か戀か
興醒さじと裏は見ず
表の消印は莫かりけり。
處女の甘き初戀と

詩人の得たる佳句には
永遠に盡きざる生命あり。
受くべき人の手に入らず
夜々の露にて消えもせば
何時かは其處に花咲出でむ。

クエカー信徒の信念を懷ふ

咲き亂れたる花蔭に
青春き血潮を踊らしゝ
ふる郷の春何人か
愛づる至情のなかるべき。

英雄も賤女も
我が生立し郷の秋
紫雲霞く夕榮えに
得ならぬ感懷は盡きざらむ。
神秘る業か魔の業か
怪しき夢の襲ひ來て

老いも暫ばしは搖藍の
往にし昔に若やぐを。
あはれ「劍を執らぬ」てう
清き誓ひは破られで
馴れ來し郷土を離れゆく
胸の思を誰か知る。

涙は止め敢えねども
「土壌(つち)」と「信念(まこと)」は替え難く
讃歌哀れに歌ひつゝ
自由の他郷(く)に移りけり。

出征

あゝあゝ夷狄を懲さん爲めに
扶桑の劍を打ちかざしつゝ
帝城辭しゆく益荒男兒の
哀れや萬感誰れ知り得んや。

あゝあゝ夷狄を懲さん爲めに
見よ見よ旭旗を打ちかざしつゝ
永刧不朽の祖國を辭する
征夫が袂に櫻花の散るを。

あゝあゝ落英散りて宿りて
征人烏拉爾の峰に死するも

故國に咲きたる萬朶の儘を
開きて匂えや八紘の空ら。

小泉八雲居士の奥津城に

祖先のめでし福音も
運命(さだめ)果敢なき漂らひの
君が胸には絶間なく

天ら打浪と響きしか。

色即是空（あるとおもへばなきかこと）
空即是色（なしとおもへばあるかこと）

道（ことは）いみじく菩提樹の
蔭に説かれし其餘韻（そのなごり）。

八雲靉く玉垣の
乙女の夢の翅かり
西九千里希臘の
磯松原に通ひけむ

潮路遙かの曙に
藝術（たくみ）の宮居望みつゝ

舟一葉を棹して
漕くや高天が原いづこ。

神代ながらの湖に
捲きては眞珠と散る女浪
文美はしく奏づるに
精靈の影や髣髴たる。

我から呼ぶは烏滸なれど
苗字等しき人の子が
蝴蝶となりてつゝ戀ふと
因緣床しく歌ふ君。

七葉の樹蔭にたゞ孤影
瞑想ては徂春を

名もなき鳥の囁ぐに
母の姿や夢みたる。

今蓬萊の奥津城に
詩(うた)より醒めし君が芳魂(たま)
紫紺の空らに壯嚴の
諸星須臾(しばし)は光榮(ええ)薄れゆく。

出塞

將軍「進め」の令を下せば
血氣に早れる益荒猛夫も
蔦生ひ繁れる陣營あとに
出行く一軍林の如し。

いづれは散るらむ花と思へど
鬼をも挫かむ勇士(ますらを)の影
長蛇の如くに道に映(うつ)れば
噫あゝ人みな涙に咽ぶ。

さはれや旭旗の風に靡けば
「萬歳」唱ふる鯨波(ひゞき)の萬頃

勇める春駒きらめく劍
「戰場河原」の森端に霞む。

うらなひ

朝露薫る花園を
黛(まゆづみ)ひそめを只ひとり
見果てぬ夢を趁ふごとく

處女(おとめ)すゞろに歩みしが。
そと散る露を見上げつゝ
またゝく瞳醒めしごと
きらめく露の牽牛花を
殘らじ讀むや頂垂(うなだれ)し。

さと吹く風を又見上げ
花の中なる紫の
花のみ讀みて笑まひしは
何うらなひの心ぞも。

春愁

うつきつごもり舞子の浦曲にて讀める

春のゆく衛に憬がれて
花に蝴蝶の狂ふごと
鐵路東に來て見れば
吹く風輕し妹が袖。

眞珠(たま)や黄金(こがね)や敷きたると
磯松原に嘯けば

我歩調(あしなみ)に新月の
黛寄する愛らしさ。

渚に出でゝ白蓮の
花びら此處に散りかふと
君誇りがに叫びしは
片われ貝を得しなりき。

薔薇の顔美はしく
夢中に試す貝合せ
過ぎての後ちに嘆たるゝ
汝が身の春を知らばこそ。

哀れ我春おもほへば
江山千里隔りて

影だもあらじ彗星の
蒼海原に落しごと。

虚榮の巷を彷徨し
十歳は夢と過ぎて又
嗾葉戰ける木の下に
春を吊ふ杜鵑。

あゝ沈痛の我幽懐！
あゝ無心なる汝が紅顔！
同じ乳房に育ちしを
運命の極印は辛かりき。
世の憂さ知らぬ汝が瞳には
萬有笑みて輝がむ

讃美の歌も曲あやに
玉を轉す響きあり。
春はいづくぞ我春は
理想の影を夢みたる
人の子神を識らざれば
それよ涙羅はまのあたり。

あゝ漣や夕靄を
島隱れゆく眞帆片帆
遊子の恨み載せずして
逢萊の浦曲畫きつゝ。

＊　＊　＊

我友のなさけは

高濱天我詞兄へ

わが友のなさけは
靈と靈とエデンの園に
曉の夢繪のごと

息吹き彩(あや)に抱(だ)きて眠るを。

魔の手觸れ幾世か
世を漂らひ見る目哀れに、
西東あさりて
あゝ今裳(も)に觸れしに似たり。

旅順落城歌

曉風闇の空ら破り
著るく靡ける日の旗に
金色映(うつ)る旭影
見よ見よそこに天啓(しめし)あり。

砲聲劍擊止まばこそ
硝煙天に漲りて
陸に長蛇の群衆か
海に猛るは海嘯か。

十歳(とせ)鍛えし日の本の
益荒猛夫の進擊に

鐵條綱も何かある
天柱碎け地維も折れ。

スラブの男兒(おのこ)息絶えて
露都の晩鐘寂びたれど
旅順灣頭飜る
旭旗の色を仰き觀よ。

遺髪うけとり

ものゝふのつるぎの光り
いなづまとかゝやぎ渡る
いかめしき高どのの上
たゆたひて歩むは誰れぞ。

くちびるも切れよとばかり
喰ひしばるわかき寡婦(やもめ)
ちゝぎみの遺髪さゝぐる
いわけなき孤児(みなしこ)守(も)りて。

――留守師團司令部樓上の一瞥――

「正義の歌」人に寄す

……大學を出でゝいざや社會の爲に聊か務むる所あらんとせし刹那より身は孽上の人となり死生の間に彷徨しつゝ今殆ど七年病み渡り居申候小生昨の友は今の仇とも成りかねまじき有樣なるに……云々と衷情を叫ひ玉ひて「正義の歌」一篇をものせられたる桃園氏のために

「正義の歌」の詩人よ
過ぎにし君が歴史の跡

縁りなき身のおのれさへ
只あやなくも偲ばれて
孤燈の下に獨り世の
涙の谷に彷徨ひぬ。

君が產聲揚げしより
母の乳房に縋りつゝ

英雄偉人を夢みたる
望はやがて螢雪の
績も著く榮えある
冠得し身の太と脆く
哀れいたづき給ふなり
はや七とせの憂き年を。

春の曙秋の夜半
走馬燈より猶ほ早く
過きゆく君が半生を
いかにか觀じ玉ひけむ
權勢利達に敏き世の
つれなき友もありとかや。

さはれ嘆きぞ詩人よ
「悟りのあるは何處ぞや」
埃及亡び羅馬失せ
世は泡沫のごと去りゆくも
正義を慕ふ人ばかり
神の報ひに飽き足らむ
悲しき琴の音に合せ

善く戰ひし約百をしぞ懷ふ。

十字架

世人擧りて我を責め
友さへ我を責らば責れ
何果敢なみて呟がむ
見よカルバリの十字架を。

時代の休徵を知ろしめし
深けゆく夜半にたゞ孤獨
名殘に祈る君が顏
汗の滴り血と流る。

君御手高う擧げませば
天らは曇りて雲愁ひ

君御手低う垂れませば
地には露けき草咽ぶ。

眠りし弟子を見遣りたる——
譬はゞ闇の森蔭へ
眠る嬰兒竊と棄てゝ
後を見返る母こゝろ。

荊棘の冠紫衣の姿勢
雨と降り來る嘲弄も
祈りの聖境に見ゆるごと
君堪え難き心地せめ。

かばかり純潔の犧牲を
牲とも知らで世の人が

呵責む罪の疾患の
徐ろ行末偲びては。

君御手高う揚げませば
天らは曇りて雲愁ひ
君御手低う垂れませば。
地には露けき草咽ぶ

さはれや「時」は滿潮の
岸に寄せ來る凄じさ
「さらば」と立ちし眞男兒。
父の聖旨を畏みて

罪の胎みし人の子が
燃す修羅の胸の焔！

嗚呼君なくばなど消えむ
見よ十字架の犧牲を。

荒ぶれ狂ふ狼の
牙齒にかゝりて倒れたる
雪より白き小羊の
血潮に染みし其姿！。

美はしきかな永遠に
陰府と天國と死と命
暗闇と光明を織成して
沈默を守る最後は。

十字架の影今こそは
あり〳〵映る胸の裡

我れ世に堪えじこれなくば
嗚呼我れ堪えじこれなくば。

雀とゆりと

見よや一羽の雀さへ
みゆるしなくば地に落ちず
ゆりの一莖野に咲いて
みかどの榮えに優る世を。

戀人と

夕月薫る青葉蔭
墨繪に似たる河畔を
手に手を携て逍遙へば
影美はしく映りしに
二人笑まるゝ比翼塚！

月下の逍遙

——雛子ヶ濱にて——

蘆の都に憬がれて
あゝ逐ふたるは何の影
筆に劍に榮えたる
ソロモンの名も今はたゞ
幻影のごと儚きを

友にも告げず今此處に。

しばし浦曲に漂らへば
十歳の春の夢の跟
あゝ逐ふたるは何の影
あゝ痩せたりな吾腕
笑ひぞ君よ夜嵐に

散るは懺悔の涙なり。

戰國の世に生れ來て
世々傳はれる劍さへ
執るに得堪えぬ漂らひの子に
亡き母の胸も痛むらむ
あゝいざよゐの月影に

暫し曇るは斷雲。

花も耻らふ若武者が
青葉の笛を吹きすさび
青葉の笛を吹きすさび
關東武者の鎧をば
絞らしめたる夜半の月

今滿洲の野も照すらむ。

松籟濤聲絶間なく
響き渡るは當年の
恨みの聲の名殘りかも
あゝ蜉蝣の世は遷り
山河ばかり永遠に在り

噫漂らひの兒の運命告けてよ。

雅歌の一節を讀みて

都大路を啓行く
ソロモン王の乘輿を見よ
黄金白銀縷める
レバノンの木は香もゆらぎ

紫の刺繍目も彩に
天蓋高く耀けり。
壯美なる大刀帶びて
蹄の音も勇ましう
六十人の衛士の影
富貴と權威を織成して

宮居遙かにシユラミの
處女心を誘ひぬ。
誘はれたる幻影を
夢にや見たる——妃嬪の
運命は同じ西東
秋の夕日の沒るがごと

英雄の末路のごと
嵯峨野に凋む枯尾花。
王者の榮華も野の百合花に
類はじとこそ悟りしか
曙の空ら精靈の
翅やあると憬がるゝ

詩人のごと怪しうも
處女の顏は輝ぎぬ——。

『妹背を契る牧羊者！
君の愛こそ我が胸に
己が愛こそ汝が胸に
彌生の春の滿潮の

碎けて花と咲くがごと
永遠の韻の溢るゝを。

あゝ聘定たる吾夫よ
我ら田舍に下りゆき
村里遠く宿らばや
朝露薫る園生には

葡萄柘榴や萠芽(めぐみ)たる
戀語るべき蔭求め。』

あゝ此こゝろ搖(ゆら)々くと
東五千里湛え來て
凩荒(こがらしすさ)ぶ旅びの空ら
遊子信仰(おもひ)に惑ふ夜半

灯影に著く映るかな
吹けよサタナの世の嵐。

*　*　*　*　*　*　*

夢なれ

——我此詩集を占ひて——

夢なれと願ふも憂しや
吾戀の文譬ふれば
美はしき虹の輪射たる
若者の征矢のゆくえか。

ふろく

バイロンの詩集繙く君うたゝねの灯影に舞
はむ金髪の乙女——或友へ——

天つちの威靈も伏せや將軍の旗飜る曉の空
ら

行かんかな駒鞭ちて遠く〳〵劍の山に花咲
くところ

青柳の靡く野里のせゝらぎに若き人の妻繪
筆を洗ふ

ますらをが大地蹴立てゝ歸らじと誓ふ哀れ
に皆な襟搔き合す

駒を止め平家の果てを繪馬堂にしばし吊ふ
花散るゆふべ

燭を取つてカルタに興じ詩に興じ君と相見
む奈良王朝の夢 ——或友へ——

若武者が走るよ〳〵唯一騎蓮華花咲く鎮守
の森端

十五夜の月に憬かれ舞子が濱に君は詩を吟じ我れ笛を吹く

車十輛ゆるく過きゆくますらをと春雨けぶる孤村の野邊を

樂をかなで歌ふ乙女に送られて益荒夫立ちぬ勇みて笑みて

日の丸の旗燃き棄てゝ大君の御代たゝえつゝ勇士(つわもの)逝きぬ（以下三首常陸丸遭難に付て）

ますらをの哀れの果てを聞し召し涙こぼるゝ大君の袖

日の本の櫻と散りしますらをの骨にぞ咲かむ珊瑚珠の花

いざよゐの夕べ詩筆を贈に代へて君と訪は
まし龍宮の郷

白銀のすゝきゆるゝと寄見れば兵士銃剣組
む林の中に

玉霰氷の刄飛び越して益荒夫猛る関の聲

君と泣ていざ筆執らむ罪の世に搖藍に豫言
者待たむは遅し

青柳の煙れる蔭に乙女子が思を碎く蹄の跟
に（出征部隊を見送りて）

注射して博士歸りし夜半に獨り愁ひつゝ書
く病床日誌（吾妹を看護しつゝ）

玉川の水の流れは若き尼の水晶の珠數くるにも似たり

ゆけど〳〵躑躅果てなく咲きにけり青野が原に紅の花

吾妹の被布の三つ紋宛らに匂ふは桐の薄紫の花

くれなゐの灯（ともしび）かゝげ將軍躍る悲歌の一曲嗽葉の蔭に

詩のむろに夏の夕榮みいりたる清興汚しゝ罪輕からず――或友へ――

妻欲しと謠ふ美男に參らする征矢を執る身は乙女繪はかき

夏姫のころもと紛う青葉蔭君見出しか神祕
のとばり——鉛山の溫泉に遊べる友へ——
平安の梅が香薫る夕月夜君と語らむエデン
の太古

小羊尾

明治三十八年九月十五日印刷
明治三十八年九月十八日發行
（定價三十錢）

復製不許

著者　高濱長江
發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　若林乙三郎
印刷者　東京市京橋區日吉町十番地　中村彌助
發兌　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店